

事業名	資源管理に必要な情報提供事業
予算区分	諸収入＋一般財源
事業実施期間	平成9年度～
担当者	(海洋生産技術担当)石川湯子, 安藤大輔, 上田幸男
共同研究機関等	各都道府県水産研究機関

<目的>

資源管理型漁業の推進と効率的な操業を支援することを目的に、本県沿岸域の漁海況を分析し、迅速に情報を提供する。

<方法>

漁業調査船「とくしま」による海洋観測結果、南西東海海況速報図、地先水温情報(鳴門庁舎, 美波庁舎, 牟岐水産資源栽培センター汲み上げ海水水温)及び県下8漁協(和田島, 椿泊, 橘町, 伊島, 由岐, 牟岐東, 鞆浦, 宍喰漁協)の漁況情報を収集し、分析検討したうえで速やかに週間漁海況情報(令和2年14～50号, 令和3年1～13号)としてホームページ, ファクシミリ及び新聞により情報を提供した。また、最新の南西東海海況速報図を月～金曜日にホームページに公表した。由岐地区の漁況情報については令和3年1月より志和岐, 東由岐, 西由岐漁協が由岐漁協に合併したことを契機に週1回の頻度でメールにより収集した。同様に伊島, 橘町漁協についても椿泊漁協経由でメールにより収集した。

<結果>

週間漁海況情報は、黒潮の動き、地先水温及び県下の主要な漁業の動向が分かるように構成し、農林水産総合技術支援センターのホームページと徳島新聞朝刊の経済面に毎週掲載した。2020年の海況と漁況の動向について表1にまとめた。

<今後の課題>

伝票から入力している標本漁協があるので、効率化を図る必要がある。また、海況の予測が担当者の視覚的な経験則に依存しているので、漁海況予測システム構築事業を通じて機械学習による予測技術を開発し、徐々に導入したいと考えている。

<次年度の計画>

毎週1回の頻度で週間漁海況情報を提供する。

<結果の発表・活用状況等>

農林水産総合技術支援センターのホームページに掲載するとともに、徳島新聞朝刊の経済面に掲載した。

表1 2020年の海況と主要漁況の動向

漁海況	区分	2020年動向
海況	黒潮	2017年8月の黒潮大蛇行が継続している。このため、室戸岬沖の黒潮は「やや離岸」～「著しく離岸」、潮岬沖沖で「離岸」～「著しく離岸」で推移した。非蛇行年に比べて、室戸岬側からの暖水波及(芸東分枝流)の発生頻度が著しく高かった。室戸岬沖の黒潮の流路の変曲部(凹凸部)から発生する傾向が読み取れた。
	地先水温	鳴門地区は気温の影響を受け、4～6月は「平常並み」～「やや高め」、7～9月は「平常並み」～「やや低め」、10～12月は「平常並み」～「やや高め」、1～3月は「やや低め」～「高め」に推移した。日和佐地区は暖水波及の消長の影響を受け、4～6月は「平常並み」～「やや低め」、7～9月は「低め」～「高め」に大きく変化、10～12月は「平常並み」～「やや高め」、1～3月は「高め」～「やや低め」に大きく変化しながら推移した。
漁況	シラス	2017年8月の黒潮蛇行発生後、暖水波及多く外海からのカタクチイワシ稚仔の補給量多く、内海発生群も良好で全般に好漁。マイワシシラスは回復には至らず。
	マダイ	大型魚から小型魚まで資源量著しく多く、小型底びき網、定置網等豊漁。
	サワラ	2017年生まれがの卓越年級群となり好漁。
	ハモ	漁場縮小し、資源はやや減少傾向にあるが、好漁が継続。
	タチウオ	小型魚の単発的な出現はみられるものの、資源回復には至らず。低水温期の紀伊海底峡谷(通称かばち)周辺の越冬場における曳縄のみ好漁。
	イボダイ	0歳魚が漁獲の主対象だが、近年発生量が少なく、漁獲も低調。
	もじゃこ	2017年8月の黒潮蛇行発生後暖水波及多く、外洋からの稚魚補給良好。
	つばす	補給量が多く、資源量も多いが、痩せている。
	めじろ	メジロクラスまで紀伊水道海域で生育するため、加入量の多さを反映して漁獲量多いが、痩せている。
	ブリ	全国的に資源量多く、本県への来遊も多い。
	シリヤケイカ	気候変動(大型台風の通過)に伴い資源量減少しているが、2020年は前年を上回った。
	コウイカ	気候変動(大型台風の通過)に伴い資源量減少しているが、2020年は前年を上回った。
	クルマエビ	親エビの著しい減少に伴い瀬戸内海東部全域で資源量が極端に減少。
	クマエビ	近年高水準を維持してきたが、過剰な漁獲圧等により2017年以降急減。
	こえび類	近年著しく資源が減少しているが、2020年は前年を上回った。
その他	暖水波及により、シイラ、マルソウダ、カツオ、ウスバハギ、メアジ等のまとまった漁獲がみられた。	